明日の淡海

自然と人の共生をめざして

Vol.19
2011.3

◆◆◆ Contents ◆◆◆

◆巻頭言　琵琶湖のやさしさを持続させよう！……1
◆センターだより　ストップ温暖化大賞低炭素杯 2011 現地レポート……2
省エネ診断実施中……6
センター活動紹介……7
◆財団紹介　財団事業紹介……9

財団法人 淡海環境保全財団
〒520-0807 大津市松本1丁目2番1号大津合同庁舎内
TEL.077-524-7168　FAX.077-524-7178
E-mail:info@ohmi.or.jp　URL http://www.ohmi.or.jp

巻頭言
kantougen

琵琶湖のやさしさを持続させよう！

財団法人淡海環境保全財団
理事長　力石 伸夫

「地球にやさしく」という呼びかけをよく見たり聞いたりします。この言葉にはどこか、人間中心主義の考え方に基づいている響きが感じられてなりません。

実は「地球がやさしい」からこそ私たちは産業革命以後の文明を享受できたと言えるのではないでしょうか。身近なところで言えば、琵琶湖がやさしかったからその恵みを私たちは享けることができたのだと思います。

ところが、やさしさにあふれた地球も琵琶湖ももはや限界というシグナルを発しています。

地球上では、近年の異常気象が温室効果ガスによる温暖化によってもたらされているのではないかと指摘され、「気候＋2℃ターゲット」を守るのに残された時間はわずかとも言われています。昨年発表された『エコロジカル・フットプリント・レポート　日本２００９』によれば、日本並みの消費社会を世界中で作り上げたら地球が2.3個分も必要になってしまうと指摘しました。

１９７０年代に琵琶湖では淡水赤潮が大量発生し、さすがの湖も悲鳴を上げました。その後、アオコの大量発生、ヨシ帯の激減、湖底の低酸素化によるイサザの大量死など、やさしい琵琶湖の悲鳴は続いています。

こうしたことから、人類の持続可能な社会づくりが議論され、実際にも進められています。議論の中では、先端技術型と自然共生型という2つの対極的な持続可能社会像がありますが、いずれにも期待したいと考えます。

先端技術型では、２０１０年のノーベル化学賞を受賞された根岸英一・米パデュー大学特別教授が提唱しているプロジェクトで、光エネルギーを使ってＣＯ２から有用な物質を作る「人工光合成」の技術開発です。夢のテーマで、全国の１００人を超す化学者が参加するようですが…開発が心待ちです。光合成の原理を活用する他の技術、例えば、無機の半導体を使った水の分解、色素増感太陽電池や有機薄膜太陽電池による発電なども期待されます。

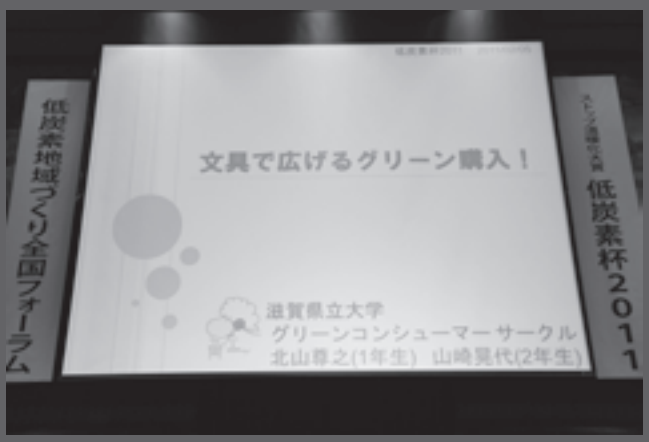
他方、自然共生型の社会づくりは、滋賀県が重点を置いていますが、これには社会の考え方を変革していくことが肝要で、70年代の「石けん運動」がそうであったように大きなムーブメントによって理解者を増やし行動する市民を引きつけていくことだと思います。

滋賀グリーン購入ネットワークが進めている「グリーン購入」は、環境への負荷ができるだけ少ない商品やサービスを優先して購入することで、県内の事業者、団体、行政など４５０社が日々の購入、調達、開発、販売においてその影響度を広げていますし、もっと身近なことでは「ヨシ刈り」の広がりがあります。92年に施行されたいわゆる「ヨシ条例」を受けて、淡海環境保全財団では行政と歩調を合わせ、ヨシ群落の造成、維持管理、ヨシ刈りなどを進めてきました。しかし近年、市民参加によるヨシ刈り（ヨシ植え）ボランティア活動は、当初、少人数の参加でスタートしたものの、環境経営に取り組む地元銀行等の積極的な賛同を得て以降、年々企業や市民の参加者が増加し、本年度では６０００名を超す人々の参加による一大ムーブメントになりました。

このような活動を広めることによって、「やさしい琵琶湖」がいつまでもそのやさしさを持続できるように、当財団としても精一杯努めてまいりたいと考えています。

財団の部屋に「蘆」と大書した田中文枝さんの額が掲げられていますが、その「蘆」の周りには真菰（まこも）、がま、フトイ、おもだか、菖蒲、ミクリなど11もの水草名が書き込まれています。この墨書を毎日拝し、豊かな琵琶湖のやさしさに思いをいたしつつ、「草木国土悉皆成仏」の想いを心に刻んでおります。

ストップ温暖化大賞低炭素杯2011現地レポート



「文具で広げるグリーン購入」

滋賀県立大学グリーンコンシューマーサークル

滋賀県立大学グリーンコンシューマーサークル、略称グリコンは、2011年2月5、6日東京大学 安田講堂で、低炭素杯2011に参加し、滋賀県立大学グリーンコンシューマーサークルの活動内容『文具で広げるグリーン購入』の発表を行いました。

グリコンは1997年12月に設立され今年14年目となり、現在は15人で活動しています。

活動目的を「人や環境にやさしい消費活動」＝グリーン 購入を促進することで、主な活動拠点は大学生協店舗です。

私たちはこの目的を達成させるために、環境に配慮した商品を選んで買うことができる『場所・商品・知識』の拡充に取り組んでいます。現在は学生にとって身近な消費財である文具の分野で活動を行っています。

主な活動は、グリーン購入をしやすい〝場所〟をつくる活動として、滋賀県立大学生協での「エコ文具の普及活動」、学生のニーズに合ったエコ文具の商品展開を行うために滋賀県立大の学生を対象にどのような文具を持っているかの調査をする「筆箱調査」を行っています。エコ文具という〝商品〟を開発する活動としてコクヨマーケティング(株)との「パンチつきWとじファイル」の開発、国産再生紙を使用した「県大オリジナルボールペン」の企画提案を行いました。他大学に向けてエコ文具の〝知識〟を広報するため情報紙「文具ウォーカー」の発行とグリコン内のグリーン購入の知識を向上させるための「勉強会」を行ってきました。

このようなグリコンの活動によって県立大学生協におけるエコ文具供給比率、供給額比率は他大学生協店舗を大幅に超える数値で推移しています。

エコ文具は通常製品より環境負荷が小さいので、グリコンの活動によりエコ文具の比率が上がることでCO2削減に貢献します。

残念ながら我々は今回入賞できませんでしたが、同じ滋賀県から出場した滋賀銀行さんが審査員特別賞を受賞する等、入賞した団体の事も少し書いてみようと思います。

現地レポート

環境大臣賞グランプリは東京都の環境NPOオフィス町内会でした。

環境NPOオフィス町内会では協力する企業に使用してもらう「間伐に寄与する紙」に、支援費(15円／kg)を紙代に上乗せするという間伐促進に充当する新たな仕組みを作っています。「間伐に寄与する紙」の印刷物には「森の町内会」のロゴマークがつき協力企業の環境貢献のアピールにもなります。現在4地域で207社が参加し、紙の使用量は835t／年に及び、そこで得た支援費により58ha／年の間伐を促進し491t・CO2／年を吸収する元気な森づくりに貢献しています。具体的なCO2削減数値を示し、サポート企業・製紙会社・森林組合にとって負担が小さく、間伐材赤字を解決する具体的な方法であり、今後もサポート企業を増やしつつ拡大していく活動です。審査員講評も『森の町内会』は書類審査もステージ審査も全委員が一致して最高の評価で、本来国がすべき仕組みを民間が創り上げ実績を出していることが評価されていました。民間主導の環境活動を進めていく可能性を感じさせることも高い評価を得ていました。

準グランプリは、大分県の日田林工高等学校林産クラブ、鹿児島県の出水市六月田下自治会、京都府の桂高校TAFF「地球を守る新技術の開発」班の3団体。

日田林工高等学校林産クラブは「里山再生プロジェクト」で、竹とバークを原料としたファイバーボードの開発をしています。

現在、処理に困っている「里山」の竹と林業地である大分県日田地方に大量に産出される樹皮(バーク)を原料とした新しい形のファイバーボードの製造実験と開発を行っており、接着剤を使用しない製法であるため安全でJIS規格にも合格。地域や竹産業工業会・研究機関・企業と連携を持ちながら製品化を検討し「産・官・学連携」に取り組んできました。ステージ発表では発表者の1人が竹のコスチュームで登壇するなどのパフォーマンスや、地域や竹産工業会と協力した取り組みであること、ファイバーボードの商品化への具体的検討がされていること

が評価につながったように思います。審査員講評では接着剤を使わない工法が環境に優しく、里山の竹害の実用的な打開策であると評価されていました。

出水市六月田下自治会は、集落58世帯全員で平成18年から二酸化炭素の削減活動に取り組んでおり、各家庭の毎月のCO2発生量と光熱費を算出し、目標に対し省エネ活動の結果が各家庭と集落全体で評価できるシステムを運営。目標達成した世帯には「エコ達人」として表彰し、集落ぐるみで楽しくCO2削減に取り組んでいます。ステージでは集落の方々が多数登壇し、集落最高齢の85歳の方も来ておられ、省エネで節約出来たお金で温泉旅行に行きました！という報告をするなど集落全体で楽しみながらCO2削減に貢献している様子が印象的でした。また地域ぐるみで低炭素に取り組む姿勢が高評価を得ていました。

桂高校TAFF「地球を守る新技術の開発」班は、温暖化防止のための都市・屋上の緑化を在来種のノシバにより、土壌のいらない軽量・節水型の屋上緑化システムを開発。また、軽量化することで建物の耐震基準をクリアし、より屋上緑化が普及することが期待できるとの事で、実際に桂高校の屋上緑化に活用し奈良県若草山頂上の古墳復元にも活用を開始しています。ステージ発表ではニュースの中継のような寸劇形式で発表しており、インタビュアーと開発者の会話を通し緑化システムの組み立て方を実演し、開発に苦労したところなどを分かりやすく伝えていました。

地域でエコ賞には、酪農のニオイ問題を光触媒で作った脱臭材の開発により解決した、静岡県の富岳館高等学校・光触媒研究班が受賞。太陽光で反応し、アンモニアを分解する光触媒再生紙チップを企業と開発し、堆肥のニオイを15分の1にすることに成功、静岡県内だけでなく、北海道や秋田県の酪農家にも導入されています。スーパー光触媒を開発することで農家からのニオイを低下させる試みは周辺住民に貢献し、環境対策と地域への貢献を両立できている活動として評価されていました。

家庭でエコ賞は、北海道のわがやの省エネコンテスト実行委員会。

北海道大樹町では、CO2排出量を削減して地球環境保全に資することを目的に町ぐるみで「わがやの省エネコンテスト」を行っており、対象世帯の8割が参加しました。創意工夫部門・リフォーム部門・モニター部門にわかれ、1人当たりのCO2削減量を算出することで自順位を競いました。実施したコンテストに参加した家庭の子どもが登壇し、実際に家庭でおこなった紙や電気のムダ使いをなくした例を発表していたのも印象的でした。

グローバル賞は、兵庫県の特定非営利活動法人ワット神戸。

太陽光発電を通じた地域経済の活性化を目的に産・官・学・民ネットワークからアドバイザーを得て、地域住民や事業者に対して新エネルギーや省エネに関する普及啓発・教育・指導といったコンサルティング活動をしています。またステージ発表では大学と共同開発した持ち運びのできる太陽光発電装置をみせアピールしていました。太陽光発電というと大掛かりなものをイメージしがちですが、とてもコンパクトな作りで会場からは驚きの声が上がっていました。審査員からはアジアをはじめとした国際的な展開が期待できると評価されていました。

コミュニケーション賞は、東京都のエコ・リーグ Campus Climate Challenge 実行委員会。

２００８年に環境NGO『エコ・リーグ』を母体として大学生を中心に設立されました。学生の過ごすキャンパスを〝大きな実験室〟と捉え、大学が社会に率先して温暖化対策を行うことを支援するとともに、大学生の意識向上が目標で、「エコ大学ランキング」による大学の温暖化対策の調査・先進事例の発信や「エコキャンパスツアー」による学生、職員、企業の温暖化防止活動の支援・能力向上など

の取り組みを行っている。「エコ大学ランキング」「エコキャンパスツアー」を通じた他大学、企業、専門家との連携が低炭素社会を普及拡大するためのシステムが評価されていました。「このなかでCO2排出量の最も多いところはどこか」(答え:東京大学)など聴衆への質問を出して興味を引いていました。

審査員特別賞は、滋賀県の株式会社滋賀銀行、秋田県のENEX株式会社、香川県のビレッジ美合館、岐阜県の高山グリーンホテルが受賞しました。

滋賀銀行は、琵琶湖をはじめとする地球環境保全への願いを込めた、「しがぎん琵琶湖原則」への賛同を呼びかけており、独自の「環境格付」を実施し、環境経営に対する「気づき」のツールとして普及に努めています。また「琵琶湖原則支援資金」により、環境保全に取り組まれるお客さんをサポートしている取組を発表されました。

ENEX株式会社は、自社で開発・製造した地下水熱利用ヒートポンプエアコンによる冷暖房を使用し菌床しいたけの周年栽培に成功。従来の空気熱源のヒートポンプは冬に化石燃料の補助ボイラーが必要で環境負荷が大きかったが、この新技術により従来に比べCO2排出量を60%削減することに成功しました。開発したヒートポンプの仕組みやランニングコストなど詳しく説明しており、従来の空気熱源のヒートポンプと地下水熱利用ヒートポンプの水と空気の熱伝導率の違いをお湯とサウナの温まり方の差に例えるなど分かりやすく発表していました。

ビレッジ美合館は、地元の山林の間伐事業で発生した間伐材をそのまま燃料として使用できるボイラーを開発し、乾燥した間伐材をそのまま温泉施設のボイラー燃料として利用することで、重油燃料に比べて大幅に二酸化炭素の排出を抑制しています。また間伐材の地産地消を目指した取り組みや、地元の中学生に体験学習などを行い、温暖化防止の普及にも努めています。ステージ発表では衣装を揃えたり、歌を歌ったりと印象に残る発表をしていました。

高山グリーンホテルは、「環境にやさしいホテルの実現」を目指してホテル施設の省エネを推進するために『木質ペレット』を使用するボイラを導入し、市内でとれた間伐材から加工されたペレットを使いホテルの温泉をわかしています。また『地域循環社会』を目指す町ぐるみの取組みをエコツアーとして紹介し、他地域へも啓発を行っています。間伐材の地産池消をめざし、市内の関係団体との協力により運営していることが伝わる発表で、観光資源としてもエコツアーを広めていこうという意欲を感じました。

WEB投票賞は、愛知県のたはらエコガーデンシティ地域協議会で、市民や事業所が省エネ行動を実践するためのきっかけとして、「たはらエコチャレンジ宣言」への登録者拡大、地球温暖化対策実践取り組みアイデアの募集及び表彰を行っています。また、小中高生及び一般を対象にした地球温暖化防止啓発ポスターの募集及び表彰により、地球温暖化防止都市宣言に伴う温室効果ガス削減の普及啓発にも努めています。ステージ発表では「環境戦隊たはらエコレンジャー」が笑いを交えて発表し、レンジャー同士の掛け合いにより、テンポ良く活動紹介を行っているのが印象的でした。

今回の低炭素杯は日本全国で企業・学校・地域など様々な視点から低炭素社会に貢献しようという活動が活性化しつつあるということを実感しました。また惜しくも入賞しなかった団体もそれぞれ個性的で素晴らしい活動をされていて、これから低炭素社会実現に向けて動こうとしている団体のよいモデルになると思います。2日目には分科会もあり、多くの団体の方とも交流できました。そのなかで感じたのは多くの団体が環境への取り組みをするなかで、いつの間にかCO2が削減することにつながっていた、という点です。なんらかの活動するときに「CO2排出を削減できないか?」とあたりまえに考えられる人が増え、そのような社会ができてほしいと感じました。

～「しがぎん琵琶湖原則」で、お客さまと手を携えて地球環境保全を～

滋賀銀行は、２０１１年２月５日、６日に、東京大学安田講堂で開催された「ストップ温暖化大賞―低炭素杯２０１１―低炭素地域づくり全国フォーラム」（主催：低炭素地域づくり全国フォーラム実行委員会）に出場しました。その中で当行は、低炭素社会の構築に向けて、お客さまと手を携えて実践してきた「環境金融」の環の拡がりについて、「しがぎん琵琶湖原則」の取り組みを中心に紹介し、『審査員特別賞』を受賞いたしました。

■低炭素杯に応募した背景
～「お金の流れで地球環境を守る」を全国に発信～

経済の血液である「金融」の役割を通じて、地球温暖化防止をはじめとする持続可能な社会づくりに貢献できる可能性はますます拡大しています。

当行は、「クリーンバンクしがぎん」を合言葉に、近畿１，４００万人の水源・琵琶湖畔に本拠を置く企業の社会的使命（ＣＳＲ）として、琵琶湖をはじめとする地球環境の保全に、全行あげて取り組んでおります。

具体的には①省資源・省エネルギーの「エコオフィスづくり」とともに、②「環境対応型金融商品・の開発・提供」による地域への環境保全活動の働きかけに積極的に取り組んでいます。

その中でも、「低炭素杯２０１１」では、２００５年に策定した「しがぎん琵琶湖原則」と「しがぎん琵琶湖原則支援資金」による、地域のお客さまと手を携えて実践してきた「環境金融」の取り組み、加えて２００９年より新たな挑戦としてスタートした「生物多様性格付」を紹介。「お金の流れで地球環境を守る」という思いを、一人でも多くの方に知っていただく貴重な機会と捉え、出場いたしました。

《活動の紹介概要》

■しがぎん琵琶湖原則
～地球環境保全への願いを込めて～

地球温暖化が原因と言われる異常気象を数多く目の当たりにする中、「今ならまだぎりぎり間に合う」との強い危機感を持って、滋賀銀行版「赤道（エクエーター）原則」とも言える、「しがぎん琵琶湖原則（ＰＬＢ＝Principles for Lake Biwa）」を２００５年12月に策定しました。

本原則は、①環境配慮行動を組み込んだ生産・販売・サービス基準を策定、②環境配慮行動とビジネスチャンスの両立、③環境リスクマネジメント情報の共有化―などを骨子とするもので、お客さまと手を携えて、琵琶湖をはじめとする地球環境保全に向けた取り組みを一層促進していきたい、との思いを込めています。策定以来、この原則への賛同を広く呼びかけております。

■ＰＬＢ格付・ＰＬＢ資金
～お客さまの「環境経営」をサポート～

「しがぎん琵琶湖原則」にご賛同いただいたお客さまのうち、希望される方には、当行独自の環境格付である「ＰＬＢ格付」を実施。お客さまのお取り組み度合いに応じて、最大で年0.5％の金利を引き下げする「『しがぎん』琵琶湖原則支援資金（ＰＬＢ資金）」も取り扱っております。この「ＰＬＢ資金」には、お客さまの「環境経営」を支援し、地域と連携して「持続可能な企業と地域社会」を実現しようとの強い願いを込めています。

≪環境格付評価項目≫

ISO14001 等の認証取得	グリーン調達・グリーン購入の取組
環境会計導入	コンプライアンスの推進部署の設置状況
土壌汚染、騒音、振動等への取組	
環境に配慮した製品・商品の取扱	環境報告書の発行
法令順守方針の策定	投資案件決定時の環境考慮対応
環境方針の策定	温室効果ガス排出量削減への取組
環境保全のボランティア活動	
省エネ・省資源への取組	リサイクルへの取組

《PLB資金 ご利用の流れ》

①PLBへの賛同 ⇦ ②PLB格付を取得 ⇦ ③PLB資金借入

■取り組みの環の拡がり
～環境格付実施 金融機関は59行に～

2010年12月末現在、融資累計831件、総額187億円、PLB賛同先数は589先、PLB格付取得先は7,133先にのぼります。

政府は「緑の投資への変革」として、「京都議定書目標達成・特別支援無利子融資制度」を創設しています。この環境格付手法のガイドラインは、当行の「PLB格付」がモデルとして採用されており、PLB格付が日本の環境格付のスタンダードになった事は誠に名誉なことです。

「PLB格付」を開始した2005年当時は、「環境格付」取り扱い金融機関は当行を含めて2行でしたが、現在は59行と大幅に増加し、「環境金融」の環の拡がりを感じています。

≪金利引下げ幅≫

PLB 格付	格付評価	金利引下げ幅
L1	取り組みが先進的	0.5%
L2	取り組みが十分	0.4%
L3	取り組みが普通	0.3%
L4	今後の取り組みに期待	0.2%

■生物多様性格付（PLB格付BD）
～生物多様性保全の普及・啓発をめざして～

2009年11月には、生物多様性についての独自の評価体系「PLB格付BD(Biodiversity)」の運用を開始しました。これは前述のPLB原則にご賛同いただいたお取引先さまと手を携えて生物多様性を保全するため新設したものです。生物多様性の重要性の「気づき」のツールや、保全活動に取り組まれる際の「道しるべ」として幅広くご利用いただけることを願っています。

生物多様性格付取得先は、2010年12月末現在で1,578先にのぼります。近年、お客さまの環境保全意識は一段と高まっています。当行は、環境省認定の「エコ・ファースト企業」として、今後も「環境金融」「環境経営」の更なる充実に向けて取り組んでまいります。

≪格付評価項目≫

分　野	評価指標（概要）
経営方針	1.「生物多様保全」方針の策定状況
推進・管理体制	2. 推進・管理体制の構築状況
活動の実施	3. 影響の考慮と低減・会費のための行動の有無
	4. ビジネスの中への組み込み状況
	5. 自然再生や伝統文化保全の活動への貢献度
	6. 専門的な知識を有する研究機関等との連携状況
普及啓発・活動発表	7. 社員や取引先に理解を深めるきかの設定状況
	8. 活動や成果の好評状況

★★★あなたも省エネ診断で「お得なエコ」を見つけましょう！★★★

滋賀県地球温暖化防止活動推進センターでは、省エネ診断を無料で実施し、あなたのライフスタイルにピッタリの省エネ対策をアドバイスしています。

1.「あなたの家庭のエコロジー度」を判定します。

「うちって本当にエコできてるかしら?」と、不安に思われたことはありませんか。

ご家庭の“どこから”“どれだけ”CO2が出ているかを分析し、平均的な家庭との比較を通じて「あなたの家庭のエコロジー度」を判定します。

2.「省エネって、どうすればいいの?」

何かしたいと思っても、いったい何をすればよいのかよくわからないってことありませんか。診断結果をもとに、あなたの家庭にぴったりな“オーダーメイド型省エネ対策をご提案します。

3.「省エネで光熱費がいくらお得になるの?」

省エネ対策を実施した場合の、「光熱費削減金額」や「どのくらいで元がとれるか」など、わかりやすく示します。

4.診断は環境・エネルギーの専門家である「省エネ診断員」が行います。

「省エネ診断員」とは、環境・エネルギーの専門家の中で、「省エネ診断のノウハウについて講習を受け、試験により選抜された優秀な人材であり、安心して診断を受けていただけます。

5.ご自宅訪問による診断もしくは、会場での診断をお選びいただけます。

「省エネ診断は受けたいけど、自宅に来ていただくのはちょっと困るんだけど…。」といった方には、ご自宅とは別の会場で診断を受けていただくことも可能です。お近くの自治会館や市役所、公民館などの会場をお借りして、複数名の診断員がお伺いし、集団で受けていただくことも可能です。また、企業様のご了解を得れば職場でお昼休みに診断を手軽に受けていただくこともできます。

省エネ診断を受けて、みんなで「お得なエコ」しましょう!

私たち専門家である診断員が、責任をもって診断させていただきます。

石井　澄夫

岩下　正憲

大野　一宇

中野　和俊

細坪　功三

診断を受けた方のご感想

（大津市在住:吉田さん）

家は二人世帯ですが、日中は二人とも仕事でいないので、何を省エネすればよいかよくわからなかりませんでした。

パソコンで診断してもらうと、意外に車からの排出量が多いことに驚きました。車は通勤に使用するわけではないので、あまりこだわっていなかったのですが、シミュレーションしてもらうと、エコカーに買い替えると我が家のCO2削減量が、かなりアップしました。

そろそろ車検だし、この際、エコカーに買い替えてみてもいいかなと思っています。

(大津市在住:田中さん)

初めて省エネ診断を受けたのですが、経済的に負担がかかるのは困るなと思っていました。

そのことを伝えると、診断員さんは、節水シャワーヘッド等、安くて効果の出るや、1分間のシャワー節約など、暮らしの仕方をアドバイスしてくださいました。

パソコンでシミュレーションしてもらって初めて、給湯から結構CO2が出ていることに気づきました。給湯機器についてもどのくらいで元が取れるかシミュレーションしてもらったところ、比較的短期間で元の取れそうなものもあり、検討してみてもいいかなと感じました。

パソコンのグラフや表などもわかりやすく、診断員さんとおしゃべりしながら、楽しい診断が受けられて良かったです。

「省エネ診断を受けてよかったです」といったお言葉をいただき、皆さんの生活が「エコでお得になった」のではないかと思います。あなたも、省エネ診断をうけて、「お得なエコ」しませんか。

（問合せ先）
滋賀県地球温暖化防止活動推進センター
（財団法人　淡海環境保全財団）
TEL:077-524-7168　　FAX:077-524-7178
E-mail:ondanka@ohmi.or.jp　担当：来田

滋賀県地球温暖化防止活動推進センター活動紹介

滋賀県地球温暖化防止活動推進センターは、「地球温暖化対策に関する法律（H.11.4月施行）に基づき、平成12年10月、財団法人淡海環境保全財団に設立されました。以来、地域における地球温暖化防止活動の拠点として地球温暖化を防止するために様々な活動をしています。大きく3つに分けてご紹介します。

（1）地球温暖化防止に関する情報発信

● メールマガジンの発行、HPの運営

本センターのメールマガジン読者を募集しています。↓

http://www.ohmi.or.jp/ondanka/center/mail-magazine.html

（下記のバックナンバーをご覧頂き、ぜひ読者になってください↓

http://www.ohmi.or.jp/ondanka/center/backnumber.html）

（2）地球温暖化防止活動推進員を支援

● 地域での温暖化防止活動リーダーである滋賀県地球温暖化防止活動推進員の研修･支援

（3）地域での普及啓発･事業実施の中核的拠点として活動しています。

● 各種キャンペーンの実施、協力（ライトダウンキャンペーン、環境にやさしい買い物キャンペーン）

● 温暖化防止啓発グッズ（パネル･グッズ）の作成･貸出しや実験･体験器具の貸出し

● 地球温暖化防止出前講座（学校環境学習、公民館講座、企業研修、環境グループ等）の実施

H22.7.7
堅田公民館出前講座

H22.9.3
平野幼稚園人形劇出前講座↑

H22.9.22　甲南公民館出前講座 →

● 各地域イベント（学校、公民館、市町環境イベント等）での啓発活動

H22.10.9　湖北文化交流センター啓発

H22.12.25　関西アーバンエコカップ卓球大会（草津市）啓発

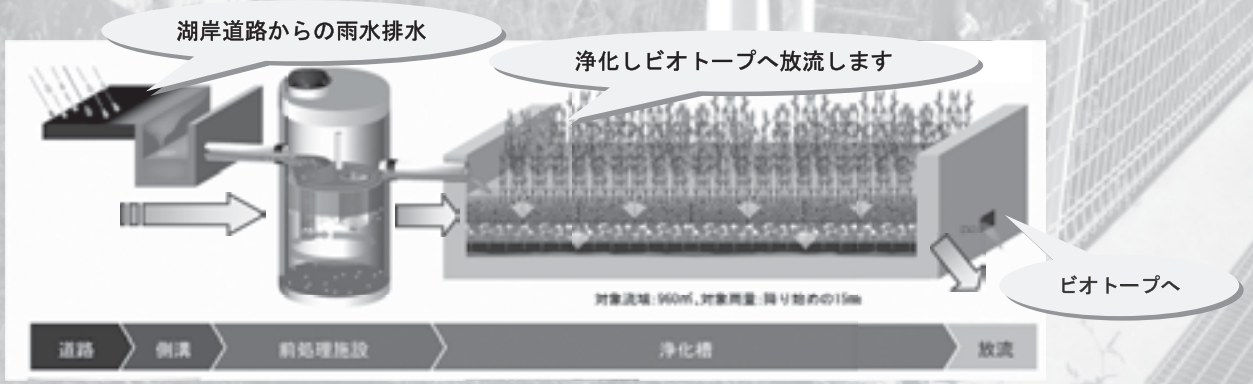
ヨシの郷モニタリング調査結果(平成21年度)

～ファーストフラッシュ浄化施設　水質調査～

湖岸道路からの雨水排水に含まれる汚濁物をきれいにしています！

晴天時に道路にたまった粉塵や油分などの汚泥は、雨が降ると琵琶湖や池などに流れこみ、水を汚しています。

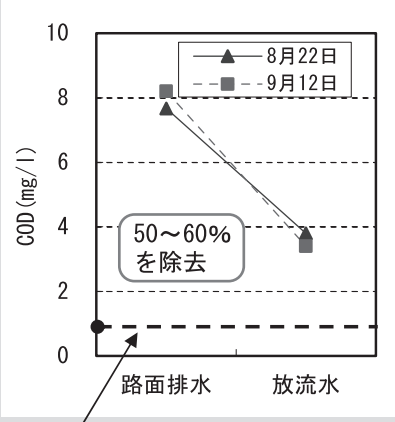
ここでは道路から流れこむ汚れた水を浄化する実験を行っています。



水質の浄化効果

COD（化学的酸素要求量）

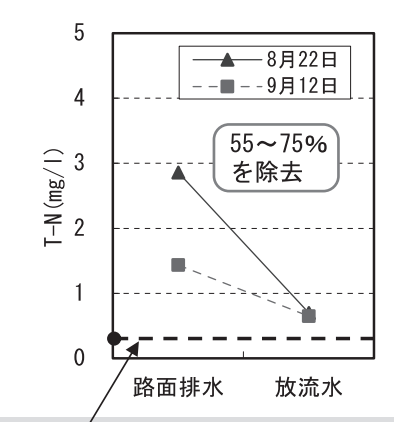
雨水排水に含まれているCODが浄化施設通過後に50～60%除去されていました。



1.0mg/ℓ以下：琵琶湖の環境基準

T－N（全窒素）

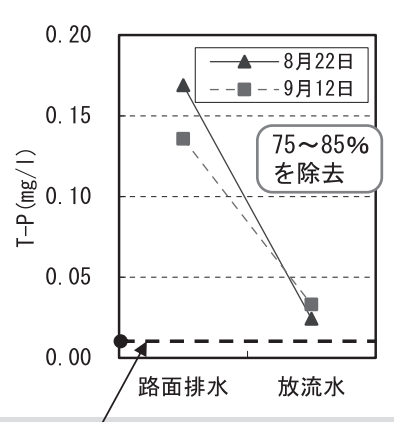
雨水排水に含まれているチッソが浄化施設通過後に55～75%除去されていました。



0.2mg/ℓ以下：琵琶湖の環境基準

T-P（全りん）

雨水排水に含まれているリンが浄化施設通過後に75～85%除去されていました。



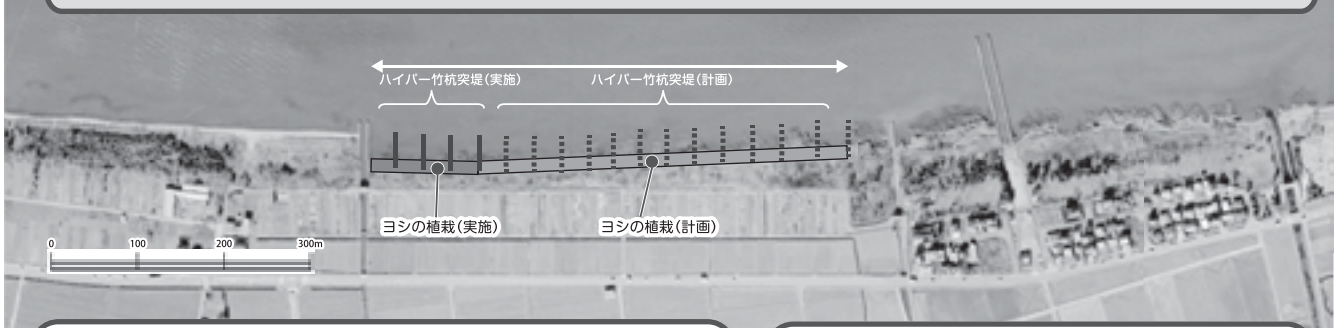
0.01mg/ℓ以下：琵琶湖の環境基準

琵琶湖の自然再生・環境保全の取り組み
～ 新海浜地区のヨシ育成事業（滋賀県）～

育成事業の概要

ヨシ帯の後退が進んでいる琵琶湖沿岸（彦根市新海浜）において、自然再生・環境保全の取り組みとして、ヨシの育成事業を行っています。

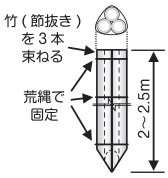
① **ヨシ帯再生**：砂浜の安定化（竹杭突堤の設置）とヨシの植栽を行い、ヨシ帯の再生・保全を行っています。
② **ヨシ帯の維持管理**：ヨシ帯の健全な保全・育成のため、ボランティアを支援しながら、冬期に刈取りと清掃を行っています。



NPO による突堤の設置状況

ハイパー竹杭突堤とは

竹を 3 本束ねた杭を用い、砂浜に突堤を設置しています。砂浜を安定させて、ヨシが生育し易い環境づくりを行っています。



突堤の効果

突堤の設置により、砂浜の土砂の移動が抑制され、ヨシが活着できる安定した植生基盤が形成されています。

ヨシの植栽について

ヨシ帯の再生・保全の取り組みとして、砂浜が竹杭突堤で安定したら、ヨシの植栽を行い、ヨシ帯の再生を促します。
植栽するヨシマット苗は、新海浜地区に自生するヨシを親木としたヨシ苗を、ヤシ殻繊維で作ったマットで栽培したものです。

ヨシ帯の維持管理について

ヨシ帯の健全な保全・育成のため、冬期にヨシの刈り取りや清掃を行っています。あわせて、このようなことを行うボランティア活動にも支援しています。

この事業は、(株)伊藤園が平成 20 年から実施している
おーいお茶「お茶で琵琶湖を美しく。」
キャンペーンからの寄付により成り立っています。

（問い合わせ）　滋賀県琵琶湖環境部自然環境保全課　TEL：077-528-3480　　財団法人　淡海環境保全財団　TEL：077-524-7168

こども環境特派員（びわっ子大使）

びわっ子大使は、滋賀県内の、いろいろな団体で、環境活動を熱心に行っている子どもたちの中から、滋賀県の代表として選ばれた子どもたちのチームです。海外、県内外の子どもたちと交流し、「琵琶湖の自然のすばらしさ」を伝えることがびわっ子大使の使命です。

今年度は「KODOMOバイオダイバシティ」の活動として愛知県で行われた生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）生物多様性交流フェアにて、多くの方々に生物多様性を守るよう呼びかけました。

※「KODOMOバイオダイバシティ（生物多様性条約と生き物を守る子どもたちの運動）」は湿地の生きものを守ること（生物多様性を守ること）をテーマにした学習活動です。

「KODOMO バイオダイバシティ湿地交流 in 琵琶湖」で、びわっ子大使の活動と琵琶湖の紹介をしました！

- 平成20年度「ラムサール条約締約国会議」<韓国>参加。（7名）
- 平成21年度「世界湖沼会議」<中国>参加。（9名）
- 平成22年度「KODOMO バイオダイバシティ湿地交流 in 琵琶湖」<滋賀県高島市>参加。（13名）

※一昨年と昨年の、びわっ子大使のメンバーが再結成されました。

「COP10イベント会場」にて、KODOMO バイオダイバシティのPR活動を行ないました！